

## 場面を正確に読み取らせる小学校物語文の学習指導 ～表現活動による児童の読み誤りの把握を通して～

水上 栄一

九州女子短期大学子ども健康学科 北九州市八幡西区自由ヶ丘1-1 (〒807-8586)

(2022年10月25日受付、2022年12月15日受理)

### 要 旨

物語文はその精査・解釈において、人物の行動や場面の様子を豊かに想像することが中核的な目標となる。ただし、場面の様子を豊かに想像するためには、叙述を基にして人や物がどのように動き、何が行われているのかについて正確に読み取らせておくことが前提になることはいままでもない。しかし、授業実践において場面の様子を正確に読み取っていると教師が判断している場合でも実際には、児童は教師が考える以上に読み誤っている場合がある。その事例として教材「おむすびころりん」「モチモチの木」「やまなし」を用いた実践例を基に、児童が読み誤り易い箇所を明らかにするとともに、読み誤りを正して場面を正確に読み取らせるための表現活動の在り方について提案するものである。

### はじめに

「場面の様子を豊かに想像することができるようにする。」「登場人物の気持ちを読み深めることができるようにする。」「人物の心情を読み味わう。」などは、物語文の読みの学習指導における目標としてよく見かける表現である。こうした目標を掲げた実践では、児童一人ひとりの読み方を重視するあまり、これが正しい解釈である、と指導することは押し付けになるとして教師が積極的に指導することをためらう傾向にあるように思われる。

そのため、こうした授業では、場面や心情の解釈が読み手の感性に委ねられることが多く、児童の読みの誤りに注目して、それを是正する読みの指導はあまり見受けられない。子どもたちが読んだ感想を出し合うことはあっても、それぞれの読みの違いを認め合うに止まってしまい、言葉にこだわった正確な読みに到らないままで授業を終了してしまうのである。

小学校国語科の目標にある「正確に理解」の部分は説明文の読みの学習で養い「想像力」の部分は物語文の読みの学習で養うというように単純に考えれば、物語文で教師が正しい読みはこうであると指導して、教師の解釈を押し付けることは良いこととはいえない。しかし、『学習指導要領解説国語編』によると、小学校、中学校共に文学的文章の構造と内容の把握の項目において「場面の様子や登場人物の行動など」「登場人物の行動や気持ちなど」「登場人物の相互関係や心情など」「文章の中心的な部分と付加的な部分、事実と意見との関係など」「場面の展開や登場人物の相互関係、心情の変化など」「主張と例示との関係や登場人物の設定の仕方など」「論理や物語の展開の仕方など」を「捉える」と記述されている<sup>1</sup>このことから分かるように、後に続く「想像」や「解釈」も内容の正確な読み抜きには成立しない。単純に正確な読みは、説明文に任せ、物語文の読みは子どもたちの自由な想像に任せておけばよいという訳にはいかない。少なくとも明らかに児童が読み誤る可能性のある箇所を、教師は的確に把握して、その読み誤りを是正していかなければならないのである。

## 1 実践研究の背景

### (1) 豊かな読みは場面の正確な読み取りから

藤原宏が、文章を読んで理解するに到るまでの過程を図1のモデルのように「関係把握力を中核とした学力構造」として表現している<sup>2</sup>。A部分によって書き表された事物・事象・現象などは、読み手である児童の有する考え方や性格、経験などであるC部分を通して個々の豊かな読みが生み出されていく。しかし、A部分を通して表現されているBの事物・事象・現象などが誤っている場合はC部分を通じた読みも必然的に誤ったものになってくる。B部分の正確な読みこそが物語の読みにおける大前提であることに間違いはない。

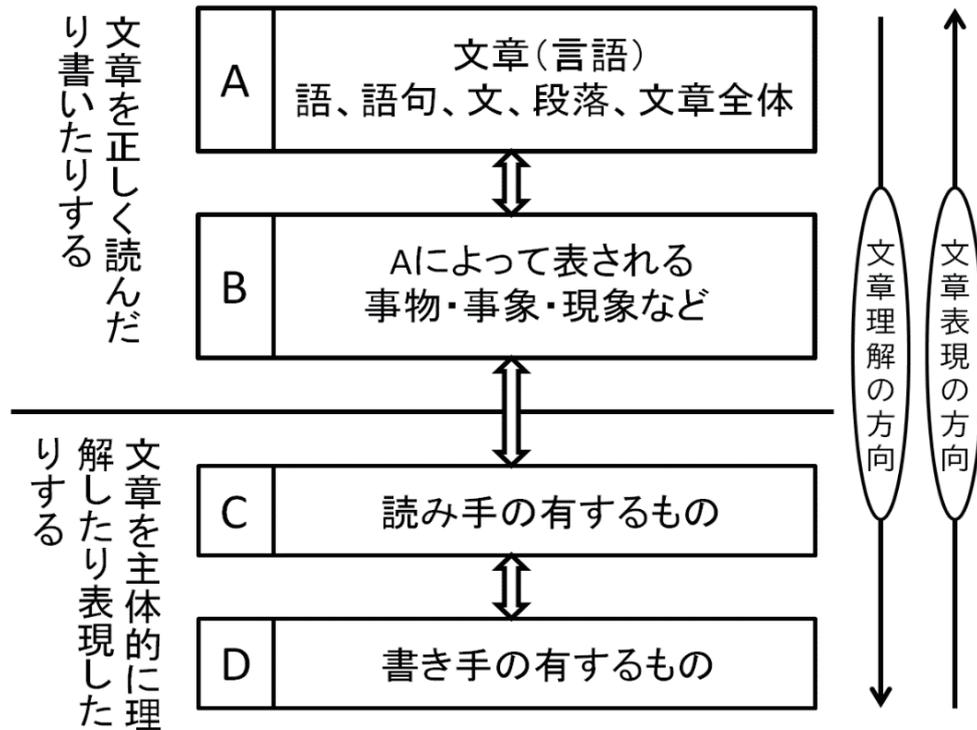


図1 関係把握力を中核とした学力構造

ところが、小学校段階における物語の読みにおいて、児童は、我々教師が考える以上に誤った場面の状況や人物の心情の捉え方をしているということが、これまでの授業実践の経験から得た実感である。なにより、小学校段階における児童には経験や知識が不足している。教科書では、児童の発達段階に応じた知識や経験によって正確に読める教材が選定されているわけだが、それでも後に挙げる「やまなし」の事例のように、カワセミという鳥が全身を水中に沈めて魚を捕るということを知らなければ、正確に場面の様子を思い描くことはできないのである。

それにもかかわらず、小学校における物語の読みの実際では、児童は内容を正しく読み取っているものと教師が思い込み、C部分にあたる自身の感想をもったり、D部分にあたる作者の伝えたい主題について考えたりする学習指導に重きを置きがちだったのではないだろうか。C部分や、D部分にあたる、読みを深める学習の前に、児童が、B部分を児童が正しく読み取っているかどうかを判断し、誤っていれば修正するという作業を行うことができ初めて発展段階であるC部分やD部分の読みにつないでいくことができるのである。

また、B部分の読みを十分に行っておかないと、児童の読みをおおらかに認めすぎて、結局なんでもありになってしまうという問題も生じる。この点について佐藤佐敏が次のように指摘している。

「日々の国語の授業で、『その解釈もありだね』『この解釈もありだね』といった〈読み〉の授業をしていると、『結局、どう読めばいいの?』といった子どもの戸惑いが表出されることがある。～中略～『どう読んでも良い』ではなく、『このように読んだほうが、読みの蓋然性は高まるよ』ということ子どもたちに提示できれば、多少ではあっても、国語嫌いの子どもたちを減少させることができる。」<sup>3</sup>

佐藤が指摘している通り、なんでも、認めてもらえるということは、児童にとって一見望ましいことのように思えるが、実はより正確な読みの在り方を知りたいという向上心を児童は常に秘めているものである。

## (2) 児童が場面を正確に読み取っているかを判断する方法

発達段階や個人的な経験の差によってそれぞれ異なる読み手の特性を通した場面の様子を想像する読みに入る前に、児童がB部分の事実を正しく読み取っているかどうかを教師はしっかりと把握しておかなければならない。しかし、発達段階にもよるが、児童が場面をどのように読み取っているかを児童自らの言葉で表現させることはなかなか難しい。

そこで、児童の読み取りを把握するための方法として、児童自身に読み取った内容をなんらかの形で表現させることが必要になってくる。その表現によって児童の躰きを教師が把握し、正確な内容の読みに導くことが、物語文の読みにおいて、感想をもったり、読み味わったりする前にまず行わなければならないことである。過去の実践例では、皆川美弥子の用いた「人物相関図」<sup>4</sup>や大西人詩の「読み取り図」<sup>5</sup>など、児童が読み取った内容を自分の言葉で生き生きと表現する手法が多く開発されている。これらの表現手法を用いると、児童がどの言葉に着目して、どのような読み取りをしているかの確に把握でき、教師が児童の読み誤りを把握したり、児童同士が相互の読みを比べあったりするために大変効果的である。しかし、こうした実践例における児童が制作した表現物を読むと、内容が大変高度であり、その表現ができること自体が一つの読みの到達点であるような印象を受ける。おそらくそうした表現が可能になるようにするために多くの時間をかけて何度も同じ表現方法による練習を繰り返したであろうことが想像される。学級の担任が国語科指導法としてこうした表現方法を用いて練習を繰り返す過程そのものは、読みの力の育成と直結するため、本論で述べる読みを確かめる方法としての表現物とは、目的の方向が異なってくる。また、最初の段階では、児童の意識が表現そのものを楽しむことに向きにくいという側面も見逃せない。

多くの訓練期間を必要とせず、かつ児童が楽しみながらどのように場面の様子を読み取っているかを表現する手法は、誤り易い箇所の性質によって選択することが重要になってくる。イメージしているものに誤りがないかを確かめるためには絵図化、動きの捉え方に誤りがないかを確かめるためには動作化やペープサート、心情の捉え方を把握するためには吹き出し、吹き出しがまだ十分に書けないような児童には表情図という使い分けが重要である。大まかに分類すると次に挙げるような表現方法が考えられる。

- 場面の様子（絵図、動作化）
- 場面の变化（紙芝居、心情曲線）
- 人物の心情（表情図、音読、心情曲線、吹き出し）
- 人物の動き（動作化、ペープサート）
- 人物の関係（人物相関図）
- 時間や事柄の順序（紙芝居、あらすじ）

もう一点、気を付けておかなければならないことは、これらの表現によって児童の読みの誤りを把握した後、その読みを正確な方向に是正する手法がこれらの表現と完全に切り離されない方がよい、ということである。感想文という表現手法で読みの誤りを発見する授業実践で、つぎのような感想を指導する側がもっていた。

「一読しただけでは、内容を十分に捉えられていないと思われるものもあった。そのため、作品全体の場面構成を確認させたり、登場人物の心情の変化を追わせたりする活動を行い、全体での意見交流につなげた。」<sup>6</sup>

この例から分かるように、読みを把握する表現物と正確に読み取らせるという指導過程は、別々のものに切り離されてしまいがちである。絵図なり、動作化なりで表現したものをよりよいものにしていくという児童のめあてを常に大切にしながら、その過程で、読み誤りを正確な読みに導くことが児童の意欲を高めるばかりではなく、着目した文の違いや微妙な解釈の違いについて話し合い、読みを深めるために役立てることができるといえるだろう。

これから、小学校の物語文教材による実践を低中高学年ごとに3例取り上げ、児童の読みの誤りの例と、その誤りを正しい捉え方へと導いていく一時間の目標設定および指導方法について考察することにした。

## 2 実践事例

### (1) 「おむすびころりん」の授業実践例

光村図書小学校1年生の教科書に取り上げられている良く知られている民話を題材にした教材<sup>7</sup>を用いた実践である。文章は七五調の軽やかなリズムで書かれており、1年生の教材らしく言葉のリズムを楽しみながら、音読や動作化の表現活動を取り入れて読み進めることができる。ただし、この教材を読み味わうにあたって児童がつい忘れがちになることがある。



図2-1 児童がイメージする  
おにぎりとおにぎりの大きさ

それは、おじいさんが穴の中に落としたおにぎりとおにぎりの大きさの比率である。穴の中に落ちてきたおにぎりを喜ぶネズミたちの様子を音読に合わせて動作化させてみると、児童は、自分たちがおにぎりを手に取って「おいしい、おいしい」と味わう動作をしながら落ちてきたおにぎりを喜ぶ様子を表現する。児童の抱くイメージは図2-1のようなものである。

児童は、ネズミのお面をつけ、自分たちをネズミに投影させて、読み進めているため、自分たちが日常、おにぎりを食べる時のようすを思い浮かべてしまう。その結果、おじいさんが落としたおにぎりを両手に持って味わおうとしてしまう動作となる。おじいさんの持っているおにぎりとおにぎりの大きさのスケールを忘れてしまっているのである。

しかし、おじいさんと、おじいさんの落としたおにぎり、そしてネズミたちの大きさを具体的にイメージすることができたならば、この動作化は誤っていることに気づく。ネズミとおにぎりの大きさは、図2-2の大きさであり、児童が動作化するならば、大きなおにぎりを両手で抱えて喜ぶ様子を表現しなくてはならない。

この事実気づかせるためには、児童間の話し合いにより、この事実気づいた児童が他の児童に説明する流れを作るとよいが、その場合も



図2-2 実際のネズミとおにぎりの大きさ

板書や掲示物としておじいさんとおにぎり、ネズミの大きさを対比できる資料をもとに説明させると、それまで気が付かなかった事実にも他の児童も気づくことができる。

さらに、1年生らしくその場を盛り上げ楽しく音読や動作化をさせるために、大きなスケールのおにぎりを準備して教室に転がしてあげるとよい。運動会で使う大玉や、バランスボールを用いれば簡単に作ることができる。

この実物スケールのおにぎりを目にして両手に抱えた児童は、それこそ大きなおにぎりを手に入れた喜びをネズミになりきって味わうことができ、その後にある「おむすびころりん すっとんとん」の音読も、うれしさのあまり踊りだす様子も、教師が促さなくても自然に踊りだし、元気な声で場面の様子を生き生きと再現できるようになる。

### (2) 「モチモチの木」の授業実践

光村図書小学校3年生の教科書に取り上げられている斎藤隆介作の教材<sup>8</sup>を用いた実践である。弱虫だっ

た主人公の少年豆太が、大好きなじいさまを助けるために、夜道を一人駆け下りていくその気持ちの変化を読み取らせることが単元全体の目標となる。

特に臆病な豆太の日常と、じいさまを助けるために、夜道をひた走る豆太の状況を対比するために、そこまで豆太に勇気を奮い起させるじいさまの深い愛情は十分に捉えさせておかなければならない。

しかし、児童の中には前半の豆太の臆病さにまつわる描写と、夜に豆太をしょうべんに連れていくじいさまの「一枚しかないふとんをぬらされてしまうよりいいからな」の一文にこだわり、じいさまの愛情よりも豆太の臆病さに目が向いてしまう児童が多く存在する。特にじいさまが豆太にしょうべんをさせながらつぶやく言葉は優しさと豆太への愛情に満ちているが、一人読みでこの言葉の良さに気づく児童は少ない。それは、豆太にしょうべんをさせるじいさまの表情を表情図で描かせると半数近くの児童が図3-1のような困り顔の表情を描くことで明らかである。また、図3-2のように怒った顔を表現する児童も数人出現する。



図3-1  
哀しみの  
表情



図3-2  
怒りの表  
情

そこで、じいさまの優しい言葉に気づかせ、豆太に対する深い愛情を捉えさせるための具体的な手立てが必要となって来るのである。

児童自らが、じいさまの心情の捉え方の不十分さと、じいさまのつぶやきに秘められた豆太への限りない愛情に気づくための表現手段としては「紙芝居」が効果的である。紙芝居は表情を図で描くという表現と、その場面の様子を音読するという二種類の表現活動が相乗的に機能するからである。先に述べた通り紙芝居づくりにあたって、この場面の紙芝居づくりとしてじいさまの表情を描かせてみると図3-1や図3-2の表情が少なからず出現する。その際、ただちにそれを修正したり、正しく読み取っている児童との話し合いによって読みを改善させたりするのではなく、そのまま紙芝居づくりを継続させてみる。

必然的に場面の画に応じた語りの文を読むことになるが、その際にじいさまと同じ表情を児童につくらせ、その表情を崩すことなく場面の様子を語らせてみるのである。豆太への愛情にあふれた「ああ、いい夜だ。星に手がとどきそうだ。おく山じゃあ、しかやくまめらが、鼻ちょうちん出して、ねっこけてやがるべ。それ、シーッ。」<sup>9</sup>という台詞は、決して図3-1の情けない表情や、図3-2の怒った表情では読むことができない。必然的に笑顔になるこの素敵な文章を子どもたちは「読めません」と、当惑し始める。この段階で、「それなら、じいさまはどんな顔をしていると思う」という再発問をすることで児童は、図3-3のような、優しさ溢れる図に描き直し、文章の素晴らしさ味わうことができるようになる。

「紙芝居づくり」のような児童にとって楽しい活動は、学習への興味を抱かせるための手段と考えられがちであるが、実は目標達成に直結するからこそ選択される活動であることを今一度再認識して、その良さを積極的に指導に取り入れていくべきであろう。

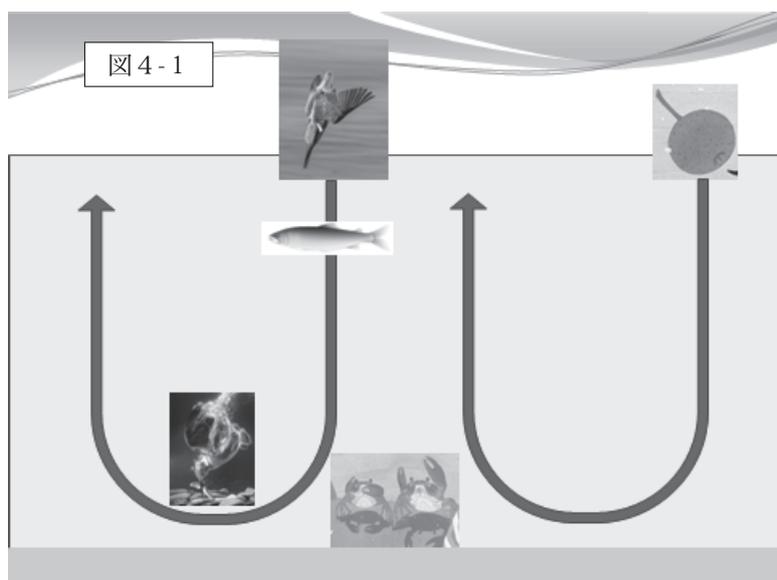


図3-3  
慈しみ

## (3) 「やまなし」の授業実践

光村図書小学校6年生の教科書に取り上げられている宮沢賢治作の教材<sup>10</sup>を用いた実践である。「やまなし」は、光と色彩に溢れた美しい場面の数々を児童自らがその経験と照らし合わせながら豊かに読み味わうための教材である。そのため、児童の自由な読みに委ねることが大切であるが、重要な個所を読み誤っている、大切な豊かな読みも深めることができない。

ところが、この「やまなし」の場合、児童は人物や事物の動きを正確には捉えきっていない場合が多い。川の流れと、川面を泡が流れていく様、そして魚やカワセミの動きなどがそれである。特にこの「やまなし」

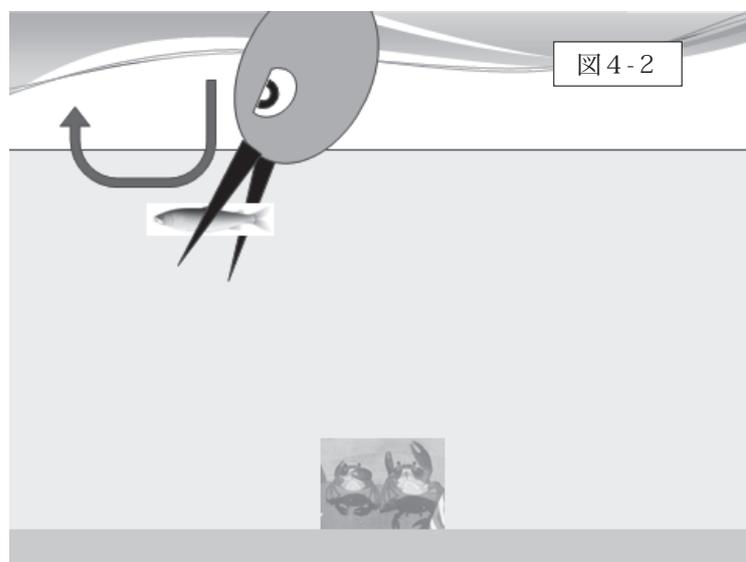


においては、死の象徴たる5月のカワセミと、生の象徴たる12月のやまなしがカニの兄弟の目の前に同じ軌跡を描いて沈み浮く動きを図4-1のように正確に読み取っておかないと、それぞれの季節における、やまなしとカワセミの役割を十分に読み味わうことができない。児童が人物や事物の動きをどのように捉えているかを教師が把握するためには、小川の中の出来事を表現する上下左右の動きを表す必要が出てくる。その意味で、単なる絵図や動作化だけで

は「やまなし」を読み取る活動としては不十分である。効果的なのはペープサートである。やまなしの物語そのものが幻燈であるという前提があるため、5月と12月を映した画面にそれぞれの人物や事物がどのような動きを見せるかをペープサートで辿らせる活動は児童が場面の様子をどのように捉えているかを教師が把握するためにも大変効果的である。

実際に、カワセミが川の中を泳ぐ魚を捕食する様子を正しくみ取っている児童は少ない。多くの児童はカワセミが魚を捕らえる動きを他の水鳥の動きのように捉えている。カニの兄弟から見ると頭上を泳ぐ魚を上の方で鳥のくちばしが攫っていく図4-2のイメージである。

令和4年7月に九州女子短期大学の一年生132名を対象に、この場面の文章を読ませ、カワセミの動きを表現させたところ129名が図4-2の動きと捉え、正しい図4-1のイメージで捉えていた者は僅か、2名（1名は図4-1と図4-2の中間程度）しかいなかった。学生の半数は小学校時代「やまなし」の学習を終えていたにもかかわらず、この結果が出たのである。このカワセミの動きを示す宮沢賢治の文章がいかに読み誤り易いか、そして、その読み誤りを訂正することなしに小学校での授業が実施されているかを示す調査結果であるといつてよい。これでは、カニの兄弟が味わっていたであろう、



目の前を死が通り過ぎていく恐怖の感情を想像しても希薄にならざるを得ない。

児童にとって、カワセミそのものを知らない限り、鳥が全身を水中に沈めて魚を捕食するというイメージを描くことは難しい。カワセミの動きを正確に把握し、場面の情景を思い描くためには、どうしてもカワセミが捕食する実際の動きを画像や動画で児童に把握させておくことが必要不可欠である。この作業を怠っては、5月の死の象徴がカワセミであることをやまなしとの対比で児童に意識づけることは困難であろう。

カワセミの動きをあらかじめ知らせておく方法もあるが、実際にペープサートでカワセミの動きを児童に予想させ、そのあとで、できるならば動画でカワセミの捕食の様子を知らせれば、児童が自らの認識を大きく揺さぶられるだけでなく、カニの兄弟が味わったと同じ、身近に死が迫り来る恐怖を児童は疑似体験することができるのである。

## おわりに

物語の読みは、子どもの発想を大切に豊かに読み味わせることが大切である。しかし、その前提となる正確な読みがなされているかについても教師は留意しておかなければならない。児童が、正確に場面を捉えているかを把握するためには教材の特色に応じた表現活動を学習過程に位置づけ、表現された内容を精査することによって児童の読みの実態を把握することが効果的である。正確な読みができていないかを判断することで、児童を正確な読みに導くための方法も講じることができる。場面の様子を豊かに想像する読みは、その前提である、正確な読みがなされてはじめて、その段階に入っていけることを忘れてはならない。

## 註

- 1 文部科学省『小学校学習指導要領解説国語科編』（平成29年 p.37）  
文部科学省『中学校学習指導要領解説国語科編』（平成29年 p.36～p.37）
- 2 藤原宏著『関係把握による読み方指導』明治図書（昭和59年 p.120）
- 3 佐藤佐敏著『思考力を高める授業～作品を解釈するメカニズム～』三省堂（平成25年 p.47）
- 4 皆川美弥子「教科書しか読ませないから、教科書も読めない」（『月刊国語教育研究』令和3年9月号、NO.593、p.4～p.9）
- 5 大西人詩「学習者の『読み』を視覚化する読解学習」（『月刊国語教育研究』令和2年4月号、NO.576、p.36～p.37）
- 6 松山宜伸「『初発の感想』を生かした『学習課題』で深める『読むこと』の指導」（『月刊国語教育研究』令和3年9月号、NO.593、p.26～p.29）
- 7 国語教科書「おむすびころりん」（『こくご 一上 かぎぐるま』光村図書、平成24年 p.58～p.65）
- 8 国語教科書、斎藤隆介作「モチモチの木」（『こくご 三下 あおぞら』光村図書、平成24年 p.98～p.109）
- 9 前出「モチモチの木」p.102にある、じいさまの台詞
- 10 国語教科書、宮沢賢治作「やまなし」『国語 六 創造』光村図書（平成24年 p.102～p.112）

**Elementary school narrative learning guidance to help students  
read scenes accurately.  
~Understanding children's reading errors through expressive activities~**

Eiichi MIZUKAMI

Department of Childhood Care and Education, Kyushu Woman's Junior College

1-1 Jiyugaoka, Yahatanishi-ku, Kitakyushu-shi 807-8586, Japan

Abstract

In scrutinizing and interpreting narratives, the core goal is to enrich the imagination of the actions of the characters and the state of the scene. However, it goes without saying that in order to have a rich imagination of the scene, it is premised on having an accurate understanding of how people and things move and what is being done based on the narrative. However, even if the teacher judges that the situation is correctly read in class practice, in reality, the pupils may misread more than the teacher thinks. As an example, based on practical examples using the teaching materials “Omusubi Kororin”, “Mochi Mochi Tree” and “Yamanashi”, we clarify the places where children are likely to misread, correct the reading errors and make them read the scene accurately. This is a proposal on the way of expression activities for the purpose.